

『絶対の研究』があったりして、この辺、先生のカラーが出ているのかなと思います。

幸綱 映画の脚本を載せてほしいというので、何人か映画監督や脚本家に会ったような気がするな。

〈20：30、佐佐木定綱さん、帰宅〉

高山 ここで佐佐木定綱さんが帰宅されました。定綱さんには適宜、われわれの話に加わっていただき、「ほろ酔いインタビュー」を続けます。

▽酒にまつわる幸綱伝説

黒岩 このあたりで年譜や歌集などでは出てこない話の一つ。お酒にまつわる幸綱伝説で確認しておきたかったことがあります。

雪の日に福島泰樹さん、晋樹（及川）隆彦さんたちが飲んでいて、カネがなくなっただけで幸綱先生に電話したら、「お前ら、しょうがねえな」と言っただけで、長靴姿で雪の中をお金を届けてくれたということ、あれはこのころですよ。

幸綱 あー、よくおぼえていないけど、場所、新宿西口の小さなバーだったよね。

黒岩 それは伝説として「ほろ酔いインタビュー」の中のどこかに出しておきたいで

すよ。

幸綱 あのこと、みんなメチャクチャだったんだよ。カネもなかったし。

黒岩 でも、飲みたいし（笑）。

大野 六六年頃のお正月に晋樹さんたちが飲んでいて、ガーンとやろうと思ったけどカネがない。先生に電話したものの、雪なので本当に来てくれるかなあと思っていたら、ドアを開けて、「馬鹿野郎！」と言って（幸綱先生が）入ってこられた、ということらしいです（晋樹「歌人片影」はる書房、九三年）。

黒岩 それ、いいよね。

加古 店の女性が（幸綱先生を）あこがれる目で見えていたそうです。

幸綱 福島、晋樹もよく飲んでたし、あのころは本当にメチャクチャだった。その前後だともうけど、野坂昭如さん、田中小実昌さんたちとよく飲んでる時期があった。晋樹君の上司で、伝説のハードボイルド雑誌『マンハント』の編集長だった中田雅久さんという人がいて、その中田さんの紹介で田中コミさんと知り合う。怪しい、変なところへずいぶん行って、妙なものを飲んで食ったよ（笑）。

（前回の話にも出た）高柳重信さんが酒

の話のクライマックスの一つかもしれない。当時はまだ戦後のつづきみたいな時代だったから、高柳さんのお宅にもクーラーなんかなくて、夏は二人ともパンツ一枚になって、裸でウイスキーを朝まで飲んだ（笑）。高柳と暮らしていた俳人の中村苑子さんは「またやつてる」と笑っておられた。

高山 昭和四十年、高柳さんが大咯血をされたとき、佐佐木先生がお見舞いに行かれて、枕元で何も言わずに飲んでたとか。

大野 先生は二十七歳でしようか。

黒岩 それも、いいねえ（笑）。

高山 「こんな優しい男はいない」って書いてあります。

・注「それは、決して無神経なのではなく、むしろ、極度に心やさしい行為というべきものであった。それは、また、数万言にもまさる無言の励ましだったろう。これは大変な男だと、そのとき私は、つくづくと思うのであった」（『佐佐木幸綱』青磁社、「若き日に」高柳重信、「心の花」一九七七年十二月号）

幸綱 酒は飲まないけど、重信さんも話されていた。

大野 どんな話をされたんですか。